

# 共立女子大学博物館所蔵－資料名「各種 名物裂」に関する研究： 作品概要

古川 咲

## はじめに

共立女子大学博物館（以下、「博物館」とする）は、学園の創立 130 周年を記念し新 2 号館が建設されたのを機に新設され、平成 28（2016）年 10 月に開館した。本学の収蔵品の中心となるコレクションは、江戸時代から昭和初期にかけての小袖・着物類を中心とする日本服飾、及び 18 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての西洋服飾である。また、これら以外にも、江戸時代の大名調度を含む漆工芸品や、アール・ヌーヴォー、アール・デコ期のガラス工芸品等も収蔵している。これらの多種多様な収蔵品は、教員のための研究資料として、あるいは授業のための教材として収集されたものである。そのため、当初これらの資料は、これを活用・利用する各学部・学科や研究室で保管・管理がなされていた。しかしその後、教員の退職や研究室の移動などをきっかけとして、これらの資料は学園で一括して管理されるようになった。そして、博物館設立と共にこれらは博物館の所蔵品となったのである。

これら資料が入手された当初は、研究室等において調査研究やその活用が行われ、資料に関する学術的な情報が資料に付随していたと考えられる。しかし現在では、上記の経緯を経て保管庫に収蔵されている資料の多くは、入手時期や購入価格などの最低限の情報を残すのみで、学術情報はほとんど伴っていない。

そこで博物館では、このように学術情報を伴わないまま、保管庫に長らく保管されてきた資料の調査研究を行い、展示や本紀要の発行を通じて、得られた情報を広く公開していくことを重要な責務と考えている。

今回はこのような未調査資料のうち、比較的早い時期に本学所有となっていた資料名「各種 名物裂」（資料 ID：341）を調査研究の対象とした。

なお、本調査・研究には、丸塚花奈子（共立女子大学家政学部被服学科染織文化研究室助手）と古川咲の 2 名が当たった。

## 1、資料の概要と研究目的

昭和 42（1967）年に入手された裂一式が今回の研究対象である。当時の記録によれば、「裂類（蜂須賀家所用名物裂）143 点」とある。詳細は明らかではないが、家政学部被服学科の教育・研究資料として蜂須賀家の関係者から入手したものと考えられる。入手後、本学で台帳登録する際に資料名が「各種 名物裂」と変更され、博物館でも現在この資料名で登録がなされている。

現在この資料は、アルミニウム製の大きな箱（縦 45.0 × 横 76.0 × 深さ 26.0（cm））2 箱に収められており、明らかに本資料とは別ものと判断できる資料も一部含まながら、未整理の状態 で保管がされてきた（図 1）。

従って、本研究では、まずこれらの資料群を分類・整理し、全体像を把握することを目的とした。分類・整理にあたっては、①裂の種類、②裂の形状、③裂に付けられていた紙札の 3 つの観点より作業をすすめ、これらの裂一式がどのような性質をもつものであり、どのように使われていたか（用途）についての検討・考



図 1. 保存されている箱  
（縦 45.0 × 横 76.0 × 深さ 26.0（cm））

察を行った。また、本資料群は現在「名物裂」という資料名で登録がなされているが、この資料名にふさわしい資料群であるかどうかについての検証も行った。

## 2、名物裂について

### 2-1、定義

前項で本資料が「各種 名物裂」と表記されていることから、まずは「名物裂」の定義について確認しておくこととする。

「名物裂」の定義については様々な説がある。長崎巖の「名物裂の概念の成立と需要の実態」(『共立女子大学総合文化研究所紀要』、21号、2015、pp.45-74)において、「名物裂」の定義についての整理がなされており、以下にそれを示す。

今日、「名物裂」として一般的に規定される要件は、次の通りである。(1) ①基本的に海外から何らかの方法で日本にもたらされた舶載の染織品(舶載裂)であり、②その舶載時期がおおむね14～17世紀頃(室町時代～江戸時代)であること、及び③それらの用途が茶道と深く関わる染織品(主に茶道具の袋や包み、掛幅の表具)であること、とされる。つまり、①種類、②時期、③用途の3つの要件が揃った裂が今日一般に「名物裂」と呼ばれるのである。

しかし、実際にはこの他に、この一般的な規定を基準としながらも、他の要素を加えて更に限定して規定する場合と、一般的な基準よりも緩やかに規定する場合の2つの定義が存在する。

前者においては、一般的な要件を満たした上で更にそれぞれ異なる下記の要件を加える。

#### 【限定した定義】

- (2) 茶会記や茶道書に固有の名称として裂の名が記されている物だけを「名物裂」として規定するもの
- (3) 『古今名物類聚』の「名物切之部」に記載されているものや、他書において「名物」あるいは「名物裂」として集録されているもののみを「名物裂」として規定するもの
- (4) 大名物・中興名物と呼ばれる茶入れに付属している物だけを「名物裂」として規定するもの

一方、後者においても、以下の3つの場合が見られる。

#### 【緩やかな定義】

- (5) 茶道具に関連するものに限らず、14～17世紀頃にわが国にもたらされた外国染織品を広く「名物裂」と規定するもの
- (6) (5)に加えて、流入した時期の上限を7～8世紀まで引き上げたり、下限を19世紀まで引き下げたりしたもの
- (7) 茶道に用いられた裂地であれば、舶載裂でなくとも「名物裂」と規定するもの ただし、これには舶載裂を模して国内で織られたものや、舶載裂と同様の技法を用いてこれに似た模様を表したものに限るとされる。

このように「名物裂」に関する定義は、様々であり、必ずしも一本化されていない現状にある。

従って、本稿では一般的な定義に加え、緩やかな定義も「名物裂」の範疇として捉え、考察をすすめていくこととする。

### 3、調査結果

本学に入った際の記録によれば143点の裂が存在したとあるが、今回の調査では145点、計138種類の裂が確認された<sup>1</sup>。これらの裂の多くは、墨書のある紙札(図2)が布端に付けられていたり、白い和紙の包み紙や茶色の封筒(図3)の中に収められていたりしている。中には紙札が裂から脱落し、紙札だけ、裂のみで存在するものもある。

なお、蜂須賀家所用であったことを示すものとして、「蜂須賀様」との記入がある畳紙(図4)や風呂敷(図5)、罫線やマス目の入った原稿用紙2種類(図6、7)等が資料中より発見された。

#### 3-1、裂の種類について

表1でわかるように、調査した145点の裂中、最も多かった裂の種類は「金襴

1 本調査では収納される箱ごとに調査を行ったため、同一裂であっても異なる箱から出てきた場合は別の調査番号を付与した。また、原則収納されている順番、束ごとに調査を進めたため、同箱内に収められている同一裂であっても、別の束にあってたり、紙札が別につけられていたりした場合についても別の調査番号を付与した。



図2. 墨書で書かれた紙札

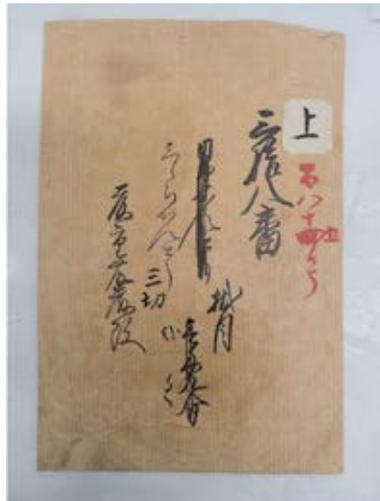


図3. 茶色の封筒



図5. 風呂敷(部分)

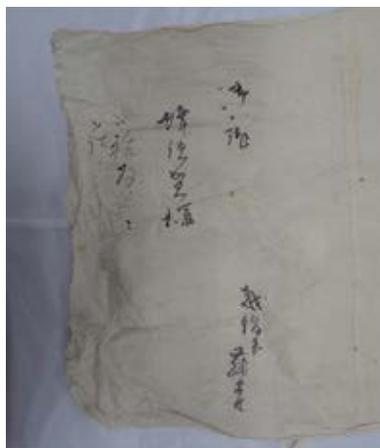
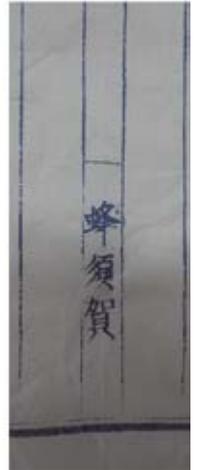


図4. 「蜂須賀様」との記入がある畳紙(部分)



図6. 罫線の入った原稿用紙



拡大(図6)

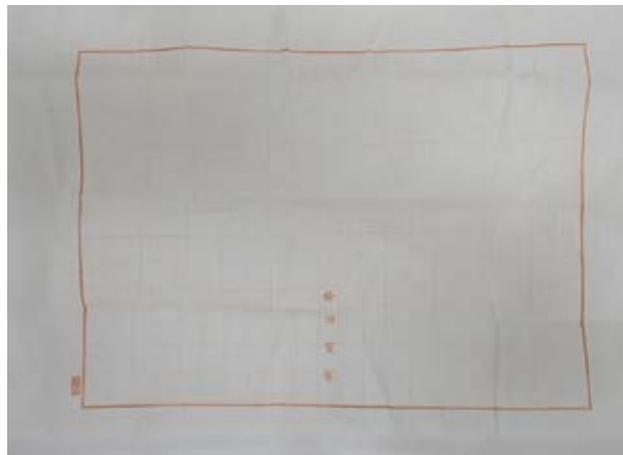


図7. マス目に入った原稿用紙



拡大(図7)

／銀欄」であり、41点(40種類)である。次いで「緞子」が36点(33種類)、「錦」が22点(20種類)である。数が多い「金欄／銀欄」、「緞子」の2種類で全体の半数以上を占め、それに錦を含めるとおおよそ全体の7割に達する。

これら3種類よりも点数ははるかに少ないが、「繻珍」7点、「風通」6点、「繻子」5点、「革」5点が本資料に含まれている。また、「縞」、「海気」、「木綿」、「ビロード」はそれぞれ3点ずつある。

ここで、本稿で扱う裂の定義を示す。

#### 【金欄／銀欄】

地組織に金糸あるいは銀糸を絵緯として織り込み、模様を織り出したもの。

#### 【緞子】

一般的には、繻子組織の織地に裏組織で模様を織り出した紋織物を指すが、本稿では繻子組織でなくとも、先染した経糸と緯糸を用い、地と模様を異組織で織り出したもの(広義の緞子)も緞子に含める。

### 【錦】

2色以上の経糸または緯糸の浮き沈みによって模様を織り出した織物。

### 【風通】

表を構成する糸と裏を構成する糸を模様の部分で交差することで、表裏色替わりに同じ模様を織り出した織物。

### 【縹珍】

縹子組織を地組織としながら緯糸に多色を用いて模様を表した縹子地の錦。

### 【海気】

経糸、緯糸に染色した異なる色を用いた平組織の絹織物。

なお、経糸、緯糸の色を変えず、同一色で織られた平組織の絹織物は平絹とする。

### 【縹】

異なる経糸または緯糸を配列して布面が筋模様を構成する織物。

### 【ピロード（天鷲絨）】

地組織に加え、経糸または緯糸で輪奈（ループ）を作っている織物。

### 【羅紗】

平織に織られ起毛された毛織物

本資料に含まれる裂の種類を概観すると、前述の通り、模様を表した紋織物類が圧倒的に多い。また、本資料の登録名に「名物裂」とあるように、名物裂で代表的とされる金襴・緞子が数の上で上位を占めている<sup>2</sup>。しかしながら、今日の「名物裂」の定義に含まれない、革<sup>3</sup>や羅紗といった染織品が含まれている点は注目される。特に、羅紗等の毛織物は、金襴・緞子と同じく14～17世紀に日本にもたらされた織物であり、当時舶載染織品として高い地位を占めた染織品であった。武家の陣羽織や火消装束、町人や武家の装身具（筥迫や煙草入れ）等によく用いられた織物であったが、鮮やかな色味（緋色・黄色等）や特有の質感のためか、毛織物類は茶の世界にはほとんど受け入れられることがなく、名物裂に含められなかった染織品の一つであった。そのため、本資料中にこれらが含まれていたということは、特徴的であるといえる。

以上、資料の分類より確認できたことは、本資料は紋織物中心の裂類であるということ、そして上位を占めているのは「名物裂」で代表的な金襴・緞子であるということである。ただし、一般的には「名物裂」に含めない革や毛織物も含まれていることから、この裂が収集された時期における「名物裂」の概念をうかがうことができる。

2 現在「名物裂」の種類としては、名物裂の普及に大きな役割を果たし、名物裂の一つの底本をなすと考えられている、松平不昧編纂の『古今名物類聚』（寛政元（1789）年～寛政9（1797）年）に基づき、「金襴」、「緞子」、「問道」、「雑載」の4つに分類される。「雑載」には、風通、錦、印金、海気等が並ぶ。

3 革については、一般的な「名物裂」の定義には含まれない染織品である。しかし、元禄7（1693）年刊行の菊木嘉保編纂『万宝全書』（美術・茶道に関する百科全書）「古今和漢書道具見知鈔」の目次には「廿九 古今織物時代之色々」、「卅 印傳唐革之色々」とあり、金襴や緞子等の織物類とは別に革の染織品が紹介されている。よって、このことから近世中期頃までにおいては、革も茶道具に使用するものとして扱われていた可能性も考えられるが、ここでは現在の名物裂の定義に従って取り扱うものとする。



図8. 布の一部分が四角形に切り取られている裂  
①グループ



図9. 布の一部分が不定形に切り取られている裂  
①グループ



図10. 小片の裂 (グループ②)



図11. 織耳 (織生地 of 両端部) しか残されていない裂 (グループ②)

表1. 裂の種類について

種類	点数(種類)	調査番号
金襴(銀襴)	41(40)	2,20,21,23,28,29,31,35,36,37,38,41,44,45,56,81,94,95,97,100,103-1,103-2,105-1,106,108,124,125,126,127,128,129,130,131,132,133,134,135,137,138,139,142
緞子	36(33)	1,3,4,5,14,15,17,18,19,22,24,39,40,42,46,47,53,54,58,60,64,71,72,78,79,80,102-2,105-2,112,113,114,115,120,121,136,140-1
錦	22(20)	16,30,33,48,49,51,55,57,59,61,62,63,70,82,84,85,86,87,88,96,104,117
錦(縹珍)	7(6)	50,52,83,98,99,110,111
風通	6	6,34,43,77,107,109
縹子(縹子/刺繍含む)	5	65,67,102-1,(116),119
革	5(4)	7,11,12,13,123
縹(間道)	3	27,32,118
海気	3	66,73,122
木綿	3	76,91,92
ピロード	3	89,90,93
羅紗	2	8,9
麻	2	25,26
平絹	2	69,75
紗/刺繍	1	10
振織	1	68
綴織	1	74
交織	1	101
頭文紗	1	141

### 3-2. 裂の形状について

裂はその形状から、大きく以下の3つのグループに分けられた。

最も多いのが①裂の一部分が切り取られていたり、あるいは切り抜かれたりしているグループである(以下、①とする)。切り取られたり、切り抜かれたりしている部分は、布端から半ばまでや布の中央等に見られ、またその大きさや形も様々で、四角形がほとんどであるが、丸形や不定形に切り抜かれているものもある。(図8、図9)。

2つ目は、①のような切り取られた痕跡のないグループである(以下、②とする)。このグループに属する裂は、①のものに比べ、大きさが比較的小さいものが多いことから、①から切り取られた側の裂であったり、切り取られた部分を切り揃えた裂である可能性が考えられる。また、①と②に属する裂には、共通して一辺が2-3cm程度しかない小片の裂や、織耳(織生地 of 両端部)しか残されていない裂も見られる(図10、図11)。

3つ目は、もともと何らかの用途のためにその形を形成し、使われていた痕跡を残すグループである(以下、③とする)。例えば、調査番号076「紺木綿地裂」(図12)、調査番号073「萌黄平絹地裂」(図13)は、裂の形状から元の用途を推測できる。前者は袴であったものを引き解いたもの、後者は火消装束の胸当ての裏地として使用されていたと思われるものである。その他このグループには、何に使用したかについては明らかでないが、布の一部が縫われていたり、かつて縫われていた針穴が残っていたり、また一度使用した際の折り跡や留め具等を残した裂

も含まれる。

以上、残された裂の形状からは、③の一部を除いて、当資料に含まれる裂類が具体的に何に使用されていたかを特定することはできなかった。ただ、①、②のグループの様子から、これらの裂は、何らかの用途に使用するため、集められていた裂類であったことが考えられる。また、縫製してあったものを綺麗に解いたり、織耳や小片の状態であるにも関わらず、大切に保存している点からは、裂を大切に保管しようとする、管理上の配慮がうかがえる。

特に、小片となった裂は、これ以上に使用することができない大きさであるにも関わらず、丁寧に1枚ずつ和紙に包まれていたり、封筒に収められていたりしている。このことから、これらの裂についていえば、大切に保管する事だけに意識が置かれていたと考えられる。

なお、裂の裏面には裏打ち紙が貼り付けられているものも多いという特徴が見られる。裏打ち紙が当てられた裂には、糸の痛みが激しいものも多く、経糸あるいは緯糸の一方のみが残り、布としての原型をとどめていないものも見られる。従って、この裏打ち紙についても、裂のこれ以上の損傷を防ぐために施されたと考えられる。

このように、裂の形状からは、本資料には、過去において何かに使用したものと、将来使用するためのものがあり、更にもうひとつ、保存するために残された裂も混在していることが明らかとなった。ただし、後者については、保存するためだけに収集された裂と、当初は使用するための裂であったが、その用途を終え、保存することになったもの、の2種類に分類することができる。

### ③紙札について

調査した裂の多くには、数種類の紙札が布の端等に付けられている。付けられている紙札は、紙札の大きさ、記載されている内容、書き方の違いから数種類に分類することができる。紙札についての詳細は、本号所載の丸塚花奈子『共立女子大学博物館所蔵-資料名「各種 名物裂」に関する研究：裂に付される紙札について』において詳しく述べることにし、ここでは紙札に書かれた情報を部分的にとりあげるに留める。

紙札に記載されている内容は、裂の種類によって違いが見られるが、番号、名称（種類）、重量（匁・分）、そして、「古渡」、「中渡」、「近渡」<sup>4</sup> というような裂の舶載時期や、「極上」、「上」、「中」、「並」、「下」というような裂の格付けを示すと思われる言葉が記されている<sup>5</sup>。また、極く少数ながら使用した際の用途と思われる情報も確認することができる。以下では、それらの用途について検討する。

調査番号017「紅地花唐草模様緞子裂」は、もともと47.5×63.6cmであったところから、19.5×32.5cmと28.0×13.5cmほどが切り取られた裂であるが、この裂に付けられている紙札には、「天目／袋／遺」との記述がみられる。この記述から、欠失した部分が茶碗の仕覆に使用されたことがわかる。

調査番号066「紫平絹地裂（海気裂）」は、筒状に巻かれた状態で保管されているが、状態が悪いため、裂全体を引き延ばすことはできない。しかし、一部分を広げただけでも、様々に切り取られた痕跡を確認できる。この裂についても、「第三百三拾三号／紫白海気□□／□ち茶器ノ□僅二用ヒル□□一／三十一匁」との



図12. 調査番号076「紺木綿地裂」（グループ③）



図13. 調査番号073「萌黄平絹地裂」（グループ③）

4 この分類は舶載された時期を示したものである。「古渡」は室町時代中期、「中渡」は室町時代中期～末期、「近渡」は近世初頭とされるが、それぞれの時代区分が漠然としており、その根拠は明らかとなっていない。

5 裂に対する格付けは、近衛家旧蔵の裂手鑑にも見られる。本作品には「上」、「中」、「下」の3段階で格付けがなされている。



図 14. 調査番号 078「茶地唐花唐草模様緞子裂」と裂を巻いていた反古紙

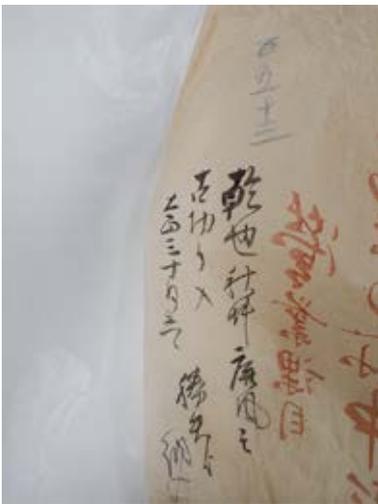


図 15. 裂を巻いていた反古紙の文字書き

記述がある紙札が付けられている。詳細については不明だが、調査番号 017 と同様、切り取られた部分は「茶器」すなわち茶入れの仕覆などに用いられたと考えられる。

この他、調査番号 110「茶地菊花入菱繫模様錦裂」と調査番号 130「茶地木瓜様金襴裂」には、「十四年六月十四□ / 御茶入御用遣」、「十四年六月十四 / 天目臺御入用遣」の紙札が付けられており、これらの裂も茶道に関係して同時期に使用されたことがわかる

さらに、調査番号 045「鶉色紵地羽団扇葵模様金襴裂」と調査番号 104「花色地捻花変わり菊模様錦裂」には、それぞれ「一号二階袋棚小襖」、「一号二階書院地袋」との記述がある紙札が付けられている。「袋棚」とは「(1) 床の間や書院の脇、違い棚の上部に壁から張り出して設けた戸棚。(2) 茶道に用いる茶棚の一種。志野棚に模して桐で作ったもの」(『日本国語大辞典』より)のことである。また、「地袋」とは「床の間のわきの違い棚の下などにつけた小さい袋戸棚」(『日本国語大辞典』より)とある。従って、この裂はともに違い棚の上や下に設けられた戸棚の襖に使われた表具裂であったと推測される。

最後に、調査番号 078「茶地唐花唐草模様緞子裂」は、16 枚の大小様々な四角形に切り分けられた裂である。これらの裂は、「浅子染物店」と書かれた反古紙に包まれていた(図 14)。この紙の反対面には、「乾也秋艸屏風之 / 古切り入 / 大正三 十月六日 / 勝矢より / 納入」との記載が見られ、この面を表にして裂が包まれている(図 15)。各裂の端には、約 5mm 程度の黒ずんだ跡が見られることから、これらの裂はもとは屏風の表具裂に使われていたもので、大正 3 (1914) 年に表具裂を新調する際に、別途保管されることになったものと推測できる。

以上のように、裂に付けられた紙札から、これらの裂は、茶道における諸道具の袋や、戸棚の襖や屏風等の表具として使われていたと考えられる。同様に、大小様々な大きさや形に切り取られていた前項紹介の裂類も茶道に関連する品々に使用された可能性を想定できる。それゆえ、本資料は第 2 項で確認した「名物裂」の用途に関する条件も満たす裂であることが明らかとなった。

また、調査番号 078 の事例より、このような裂の収集・保管は大正時代まで行われていた可能性がある。ただし、調査番号 078 の裂には、紙札が付けられておらず、紙札を付けた時代とは時間のずれがあると考えられる。

#### 4、考察

本研究では各種裂の実態を明らかにすることを目的として、①裂の種類、②裂の形状、③裂に付随する紙札の 3 つの観点から考察を進めた。

その結果、本資料は紋織物を中心とした 16 ~ 19 世紀にかけての各種裂であり、形状、および紙札に記載される情報から、衣服や茶道具の袋や包み、及び棚の襖や屏風等の表具裂として使用された裂類であることが明らかとなった。そして、これらの情報を集約すると、一般的な「名物裂」の定義より包含する時代の範囲は広いものの、裂の種類と用途の点から、これらの裂は、本学の所有に帰した際の台帳記載名称の通り、「名物裂」としての性質を有する裂類であるといえる。それは、紙札に記載される情報に「古渡」、「中渡」、「近渡」等の名物裂と関係が深い言葉が含まれている点からも裏付けられる。

しかしながら、本資料の内訳と保存のされ方に注目するとこれらのほとんどが

名物裂に分類されるものであるとはいえ、一般に名物裂の範疇には入れられない革や毛織物類が含まれていることから、稀少な裂を集め、保存することに主眼が置かれていることがわかる。

一方、使いかけの裂がたくさんあることから、もともとは使用するために収集・保存がなされていたが、その後、知識を得るためや研究、鑑賞するための裂として保存・管理する方向に意識が変わっていったと考えられる。

桃山時代に茶の文化が大成し、江戸時代に茶の世界に適した金襴・緞子といった一部の裂が良いとされるようになり、「名物裂」というジャンルが確立するとともに、裂を手元に置き、賞玩するという意識が高まっていった。

やがて近世後半になると、舶載時期にこだわり、格付けの行為を行うなど、裂についての知識を深め研究するための蒐集が行われ、裂に対する意識が変化していったと考えられる。それは、裂の小片を丁寧に貼り込んだ「裂帖」や「裂手鑑」が江戸時代後期以降にたくさん作られていることから明らかである。これらの「裂帖」や「裂手鑑」は、大名家や豪商家において、作成されたものである<sup>6</sup>。当初の記録に「蜂須賀家所用」と記されていた本資料も、形式は異なるものの、そのような意識のもとで、格付けを行った紙札を付けたり、裏打ち紙を貼ったりしたものと考えられる<sup>7</sup>。

そして、その意識は、使用後の余り裂や使われた裂をほどいたものも含めて蒐集の対象としているように、更に純粋に古い染織品を蒐集するという意識へと向かったものと考えられる。その証拠に大正時代に収集・保管されたと思われる調査番号078「茶地唐花唐草模様緞子裂」の紙札には、「古切」と書かれている。この記載からは、「名物裂」という意識よりも、純粋に古い裂を大切なものとする価値観のもとで、使用されていた裂でさえも剥がして大切に保管しようとする意識が感じられる。

このように、裂の内容やそれらの保存のされ方からは、本資料が近代以降の人々の裂に対する考えが強く入り込んだ資料群であり、「名物裂」に定義されるものよりも、広い要素をもつものであったと結論づけられる。そして、この意味において、本資料は、近代以降の人々の染織品に対する価値観や、近代における「名物裂」の概念をうかがうことのできる貴重な資料群であるといえる。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり長崎巖教授（当館館長、共立女子大学家政学部被服学科教授）には、終始にわたりご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

6 大名家のものには前田家、徳川家、毛利家旧蔵のものがあり、豪商のものには江戸時代の豪商冬木家、三井家旧蔵のものがある。現存する「名物裂帖」、「名物裂鑑」については、五島美術館学芸部編『名物裂 渡来織物への憧れ』「名物裂・六手鑑」において詳しく取り上げられている。

7 資料中、裂には付けられていないが、調査番号053「茶地緞子裂」と同じ和紙から出てきた紙札には「明治十三年五月改／中 紋カイキ／黒川極」（下線部筆者）との記載が見られた。よって、本資料においても裂に対する格付けのような行為は近代に行われていたといえる。また、「明治十三年五月改」とあることから、明治13年以前において付けられた紙札があり、その後本紙札が明治13年に付けられた可能性が考えられる。





通し調査 番号/番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (寸×寸×cm)	裏打ち 紙	《A》名称付き紙札 13.1×3.0 黒鉛筆模様の金入/百九番/黒 鉛模様の龍金入/掛目 一列九 分	《B》番号・掛目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「龍書」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川程」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
41	白地角龍模様金襴製	金襴	1	18-19	9.5×6.5								
42	萌黄縞子地花唐草模様紙子裂	紙子	1	18-19	16.0×4.0		第四拾貳号/九分						
43	白地茶巾第五様風通製	風通	1	18-19	15.6×1.8	●	第七号 二切/九分						
44	白地丸模様の紙製	紙製	1	18-19	11.5×2.6		近邊白地綴入/四十一番/御地 白模様の掛目 巻外四分						
45	藍色地に羽回唐草模様金襴製	金襴	3	18-19	14.05× 7.0/12.0× 9.8/74.8×7.0	●					一号二階袋掛小袋		
46	薄茶地花巻甲唐草巻文字模様紙子裂	紙子	1	18-19	24.3×13.4		大拾四号/下 六列/紙子/二列 一分				大六/近邊り紙子/花色柄/巻巾 半八列五分		
47	調草番号07と同製/黄色地唐花鳳凰模様紙子裂	紙子	1	18-19	不30.7×6.5		古渡口/四/圓/五十一番式 百?十号(朱)/御地蔵/巻目式 身白巻外七分						
48	調草番号057と同製/緑白段唐花唐草模様紙製	紙製	2	18-19	13.5×2.6/19.8 ×3.6		近邊緑織 中邊外ヒレ線/六十番 /御地蔵三切龍花縞子/掛目式 外口分						紙製:口百一(朱)/六拾 番(朱織)/近邊口百中邊外ヒレ 線/巻目式 外五分/巻外二分/ 龍草織改
49	①紺地鳥模様の紙製/②茶地花模様の紙製	紙製	1	18-19	1.0×20.2	●	第七十三号/二分						
50	黄色地花模様の紙製	紙(縞珍)	2	18-19	11.5×3.5/3.7 ×2.1			中邊/武百口一(朱)/龍ヶノ/ 巻目/清水切					
51	紺地鹿鹿鳥模様の紙製	紙製	1	18-19	9.5×6.2		明細馬鹿鳥/吾四十八番(朱 線) 掛目 巻外九分五分/百六 十						
52	茶地模様の紙製	紙(縞珍)	1	18-19	4.6×12.5		中邊子地金入茶地模様の百三 十号/掛目 巻外五分/内九列 脚口影口口口口口						
53	茶地縞子裂(模様不明)	紙子	1	18-19	幅12 長33.2	●	第六十九 二分					(調査番号053ともに出ている 紙札、おそらく同じ製法の紙札):① 明治十三年五月改/中 敵カキ /黒川程 ②中邊縞縞縞縞子/丸 一列九分/③百六号中邊七十六 (朱)縞子縞子/巻目/三分	
54	調草番号115と同製/紅地/鳥子縞縞縞子裂	紙子	2	18-19	5.7×13.5/5.6 ×4.6	●	五十五 五分						
55	紺白段縞子模様の紙製	紙製	3	18-19	不:21.0×21.0								
56	白地縞模様の金襴製	金襴	1	18-19	4.0×1.8	●							紙製:三拾九番(朱織)百五十八 (朱)/六十三(朱織)/第七二七 十/八(朱)/近邊口かん口/和勝 /巻目 巻外五分/近邊/龍 草織改
57	調草番号046と同製/緑白段唐花唐草模様紙製	紙製	1	18-19	7.2×7.1								
58	花色地縞子裂(模様不明)	紙子	1	18-19	2.4×12.0								
59	茶地縞子裂(模様不明)	紙製	1	17-18	2.2×7.6	●							

通し調査 番号	調査 番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (タテ×ヨコmm)	裏打ち 紙	《A》名称付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・項目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「亀吉」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川種」名入り紙札 13.2×2.7	《E》所名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
60	00	花色地小花模様紙子裂	紙子	1	18-19	20.7×5.2								
61	01	黄紅縹段小菱模様紙裂	錦	2	18-19	不:24.5× 5.3/6.5×1.0								
62	02	紺地花入斜格子模様紙裂	錦	2	18-19	長77.8 幅 9.0/3.6×7.3								
63	03	紺地蓮華模様紙裂	錦	2	18-19	13.8×4.6/14.2 ×11.1								
64	04	白地獅子裂(模様不明)	紙子	3	18-19	61.7×7.0/60 ×6.7/2.2×6.8	●							包み紙:三(巻)/白口字第百六 号(朱)/並 紙子/四分
65	05	紅地獅子裂	紙子	5	18-19	幅5.1		第二三三号/六八八分						
66	06	紫平絹地裂	海気	1	18-19	-		第三三三号/紫白漣気口 口茶器ノ口僅二用ヒル口 一/三十一号						
67	07	濃茶地獅子裂	紙子	1	18-19	-		百七十七号/備江口獅子丸/三 十五号六分					百七十七号	
68	08	振籠反物(一反)	振籠	1	18	幅34.0		第三百六号/武十一号四分						包み紙:第百二十二/津張子/ 八十八号
69	09	紅平絹地裂	平絹	1	18-19	49.0×45.4		三号八分/武百武拾五号						
70	70	茶地獅子入丸紋模様紙(用途不明)	錦	1	17-18	不:長223.0 幅 6.0			(他の裏の紙継りの可能性)① 第三百六号/口十一号四分、② 第三百三拾八号/白又布/六十 八号					包み紙:第百三拾六号/十六号 四分
71	71	調査番号047と同裂/黄色唐花鳳凰模様紙子裂	紙子	1	18-19	100.0×1.0								
72	72	紅地唐草ノ子入模様紙子裂	紙子	1	18-19	9.5×3.0								
73	73	萌黄平絹地裂(元・火州染草介)	海気	4	18-19	-								
74	74	海茶地雲龍模様紙裂	綴織	1	18-19	35.0×38.0		三百六号/古金欄						
75	75	白平絹地富士模様紙裂	平絹	1	19	100.0× 44.5/68.0× 46.0								
76	76	紺平絹地裂(元は袴か)	木綿	7	18-19	94.5×35 他								包み紙:口籠/口の内、金三圓
77	77	花色地雲龍模様紙裂	風通	1	18-19	18.0×46.5		中渡/百十九/風通二切/亀吉		名八/中渡ツツ/茶地雲角/内 脇/白口字武拾五号九分				
78	78	茶地唐花唐草模様紙子裂	紙子	15	18-19	-								包み紙:乾也秋申再風之/古切り 入/大正三 十月六日/勝兵士/ 納入
79	79	黄色地三ツ白模様紙子裂	紙子	1	18-19	18.50×61.0								製菓三口シロ 口外リテ口 口十三口
80	80	白地雲巻七宝模様紙子裂	紙子	1	18	60.7×65.6		中渡/獅子/亀吉		名八/生瀬山獅子/備茶巴才紋/ 題目三十五号(巻)百二十九				よせ近渡り獅子/白地輪蓮/題 目十号九分
81	81	紺地牡丹菊 模様紙裂	綴織	1	18-19	69.8×7.3		百十四・二切/口即/備置/亀吉 間断/六号六分/黒川様						れ七/活瀬山巻入/花色五号兼口 口(備置?)/題目口口口



通し番号 番号	通し番号	作品名	種別	数量	世紀	寸法 (タテ×ヨコ×タリ)	裏打ち 紙	《A》名新付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・押目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「龍舌」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川屋」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 18.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
104	100-1	白地銀襷製	銀襷	1	18-19	不: 209.5 × 53.6								
105	100-2	金襷製	金襷	1	18-19	28.1 × 46.6			武百武拾六番/三列			口金/口口口切/口口		
106	104	花色地捻花菱わり菊模様錦製	錦	10	18-19	13.5 × 40.0/33.5 × 9.2/12.3 × 10.0/9.5 × 7.5/48.0 × 3.0/46.5 × 4.0/5/14.5 × 2.6/47.3 × 13.5/85.5 × 2.6/51.7 × 2.6 (別冊7/65)							一号二階書院地袋	
107	100-1	茶地雲様金襷製	金襷	1	18-19	165.8 × 89.1			百五拾一列/中/銀紗/黒川屋					
108	100-2	茶地花模様錦子製	錦子	1	18-19	52.5 × 64.6			百五拾一列/中/銀紗/黒川屋					
109	108	濃青地草花模様錦製	銀襷	1	18-19	124.5 × 17.8	●		和物/百四十四/紗金?/七列/ 電言					裏(裏面): 丸十
110	107	①茶地菱わり江模様風通製/②茶地梅花模様風通製	風通	1	18-19	159.4 × 55.0	●		拾号/中/風通/三十五列					
111	108	紺地鳥花模様金襷製	金襷	1	18-19	86.0 × 55.0	●							
112	109	茶地鳥雲唐花入丸紋模様風通製	風通	1	18-19	18.12 × 41.2	●		卅七号/並/風通/十八列					
113	110	茶地唐花入菱模様錦製	錦(縹紗)	2	18-19	87.8 × 58.2/17.0 × 31.9	●		拾五号/上/シチン/十五列八分					
114	111	茶地唐花入菱模様錦製	錦(縹紗)	1	18-19	55.6 × 57.1	●							
115	112	萌黄地拵枝梅模様錦子製	錦子	1	18-19	34.5 × 61.6	●		真十二号/並/銀子/二切八列三 分 六角部分					
116	113	黄地下が唐丸窓文草入丸模様銀子製	銀子	1	18	150.0 × 83.7								
117	114	花色地唐花入丸紋模様錦子製	銀子	1	18-19	42.5 × 46.5		近邊丸紋銀子/名物近邊八山人 刺子/縹目 七列七分/廿九番/ 脚地花色銀子模紋						
118	115	脚車番054七両製/和地「勇」字模様銀子製	銀子	1	18-19	82.4 × 86.6								
119	116	黄帯子地風車模様製	縹子/縹襷	1	18-17	180.8 × 80.8	●		七号/上 萬唐/口口/四十八列					
120	117	紅地牡丹唐花模様錦製	錦	1	17-18	123.8 × 84.5	●		六角/菊口花/四十四列					
121	118	茶地大格子小格子模様製	縹(間道)	1	17-18	113.7 × 88.4	●		拾四号/並/唐葉織/十八列					
122	119	茶地縹子製	縹子	1	不: 125列以上 × 660				三百五十九号/茶縹子					
123	120	黄地「勇」文字入り丸窓紋らし室辰く模様縹子製	縹子	2	18-19	154.5 × 34.0/35.3 × 32.5/193.0 × 32.5	●		拾六号/並/縹子/三十六列					
124	121	和地文字室辰く模様縹子製	縹子	4	18-19	91.9 × 29.4/28.7 × 28.0/117.7 × 33.9	●							
125	122	茶平脚地縹子模様製	縹気	1	18	87.0 × 38.6	●		拾八号/並/絞縹黄/十八列五分					

通し調査 番号	作品名	種別	数量	世紀	大きさ (寸法×寸法×cm)	裏打ち 紙	《A》名称付き紙札 13.1×3.0	《B》番号・押目付き紙札 7.5×2.4 5.3×2.4	《C》「亀吉」名入り紙札 11.7×3.1	《D》「黒川程」名入り紙札 13.2×2.7	《E》匿名番号付き紙札 19.1×5.0	《A》～《E》以外の紙札	その他
126	123 間草番号007と同じ立派様草履草履(相款付巻)	草	1	19	-								和紙:軍ノ部/第五号
127	124 納戸総地盤様金襴裂	金襴	2	18-19	39.0× 37.5×39.8× 40.7	●		中渡/金襴/七十四(朱)/亀吉	七十四/中/総金 亀吉同断/黒川様				
128	125 茶地草花様金襴裂	金襴	2	18-19	21×20.7/5.7 × 39.8	●		百五号/総金/二切/五分					
129	126 間草番号137と同型/埴地鳳牡丹唐草様金襴裂	金襴	2	18-19	54.5×22.7	●		和物/八十(朱)/金襴/二切 六 分五分/亀吉					
130	127 黄地雲様金襴裂	金襴	1	18-19	55.7×37.3			中渡/総金/亀吉	中口十九/白/白/総金/黒川様 へ二/黒島時代総金/黄地雲/鷹 目八分四分				
131	128 濃青黄地雲様金襴裂	金襴	1	18-19	69.5×72.8			和物百二十二/金襴/亀吉	口口口/井/金襴/黒川様				
132	129 茶地雲様金襴裂	金襴	1	18-19	97.7×69.8								
133	130 茶地木瓜様金襴裂	金襴	1	18-19	41.3×59.1								
134	131 白地地唐草様金襴裂	金襴	1	18-19	45.3×32.6	●		中渡/上白地地大紋唐草金入 箱目 十切/百六番	百十七/中/地金襴/亀吉同断 九分二分/黒川様				
135	132 茶地花入丸紋様金襴裂	金襴	1	18-19	67.3×69.5	●							
136	133 紅地雲様金襴裂(* 盛装金襴)	金襴	4	18-19	128.5× 32.0/110.2× 46.7/119.0× 31.7/138.2× 45.7	●							
137	134 黒地唐草様金襴裂	金襴	1	18-19	21.2×67.5	●							
138	135 濃青黄地唐花様金襴裂	金襴	1	18-19	19.7×37.5	●							
139	136 白地掛物様様子裂	様子	1	18-19	46.8×51.1	●							
140	137 間草番号126と同型/埴地鳳牡丹唐草様金襴裂	金襴	1	18-19	22.4×69.6	●							
141	138 茶地牡丹入鳥様金襴裂	金襴	1	18-19	89.0×69.9								
142	139 白地唐草様様金襴裂	金襴	1	18-19	160.1×54.8								
143	140-1 茶地梅牡丹鳥様様子裂	様子	1	18-19	109.4×74.7	●							
143	140-2 茶地梅牡丹鳥様様子裂	様子	1	18-19	81.8×75.6	●							
144	141 埴地龍様様子裂	様子	4	18-19	75.4× 64.3/20.1× 25.6/16.1× 27.4/15.7× 23.4	●							
145	142 濃青黄地雲様金襴裂	金襴	1	18-19	41.2×19.2	●							

## Wedding costumes with blue ground

- Wedding costumes in the Edo period and succession of that tradition -

NAGASAKI Iwao

Abstract:

In the wedding costume, it is presumed that in the first half of the 18th century, a format was established in which uchikake (outer garment) of white ground, red ground and black ground were sequentially changed on white aigi (inner garment). Although these kinds of uchikake were given auspicious pattern regardless of the ground color, there is a blue uchikake which represents a pattern very similar to these, as a group. This article attempts to verify that such work is a wedding costume worn the fourth after the black one.

In Japan, the word "Ao"(blue) has etymologically been closely related to "Kuro" (black) , "Aka"(red) and "Shiro"(white), but on the other hand "Ao"(blue) is in an incidental position for these three colors, so even in wedding costumes.

It seems that the wedding costume of the blue which started its use around the middle of the Edo period had gradually been forgotten as the Japanese tradition was lost along with the progress of westernization since the Meiji Period.

Keywords: wedding costume, auspicious design, background color

## Collection of Kyoritsu Women's University Museum

- Study of the work " various kinds of *Meibutsu-gire* textiles " : outline of the work

FURUKAWA Saki

Abstract:

This purpose of this study is to clarify the work outline of "various kinds of *Meibutsu-gire* textiles" (ID 341) in the collection of the Kyoritsu Women's University Museum, and to clarify the work outline of proceed three points of view of (1) type of cloth, (2) cloth shape, and (3) paper notes on cloth .

As a result, this work was made from 16th to 19th century with mainly textile fabrics, the textiles used as clothes, as tea ceremonial bags, as shelf sliding doors and folding screen. Therefore, as shown in the records of the ledger book, this work can be said to be a cloth that satisfies that requirement, although the range of the era will be wider than the definition of general " *Meibutsu-gire* " textiles.

However, from the point that the work includes a part of leather cloth and woolen fabric, which is not included in the range of the definition of general "*Meibutsu-gire*" textiles, and the point where the cloth after use waskept, it is thought that collecting was done based on the values of treating old cloth as important, regardless of "*Meibutsu-gire*" textiles. Since the act of collecting and storing such cloth is from modern times and thereafter, it was also revealed that this work reflects the idea of people's cloths since modern times.

Keywords: *Meibutsu-gire*